二宮金次郎と相互扶助組織

大竹道茂

尊徳思想を伝えるゆかりの地

研究会のお招きで、二宮金次郎のお話をする機会に恵まれましたが、皆さんのアンケートを読ませていただいて、妙に納得したのは成人してからの金次郎について初めて聞いたというもので、特に、年輩の方でも藩財政の再建や協同組合を作った人とは知らなかった。というものでした。

戦後、世相が落ち着いてからは、金次郎についてあまり耳にする機会はなくなっていましたし、金次郎像も学校の校庭から消えていきましたので、まぶたに焼き付いた、薪を背負って本を読む金次郎像と、「柴刈り縄ない草鞋をつくり」と耳に残る小学唱歌「二宮金次郎」の歌詞からくるイメージだけで、成人した金次郎は思い浮かばなかったのも無理はありません。しかし、生い立ちから桜町をはじめとする藩の財政再建や日光仕法の話しまで児童書「二宮金次郎」には掲載され、図書館の偉人伝記の棚に並んでいます。

金次郎（尊徳）、そして、弟子たちが活躍したゆかりの地（北海道・福島・茨城・栃木・千葉・神奈川・静岡・三重の二三市町村）では、今日でも連綿と尊徳の思想を受け継ぎ、学校教育の場で、家庭や地域で、次世代にその精神を伝えています。

また、公益社団法人・報徳社（一九年現在一〇三社）も、活動を通して尊徳の教えを伝えているのです。

波乱万丈の人生を歩んだ金次郎

父の死により貧乏のどん底生活を味わい、二年後には母まで亡くし、一六歳でおじの万兵衛に引取られ、二宮家の再興を自らに言い聞かせる。「菜種の栽培（注一）」や「捨て苗（注二）」などの実践から、生涯を貫く理念「積小為大（注三）」を悟ります。

金次郎ブロンズ像

金次郎石像

おじの家を出てから努力を重ね、母親が亡くなって十年の歳月の中で家の再興を果たします。その間、名主の家に出入りして、学問についてさらに深めていったわけですが、これまでの経験が大きく、金次郎は儒教の教えをこれまでの人生経験から精査して、「勤労」「分度」「推譲」（注四）などの報徳の教えを確立し、人々を導くことになります。

二五才のとき、小田原藩の家老服部十郎兵衛の家に住み込んだことから、さらに、大きな人生の転機を迎えることになります。

ヨーロッパより早く生まれた金融組織

服部家では、三人の若様が学ぶ、漢学塾通いのお供をしたり、復習の手助けをする中で、儒教に対して一層の知識を深めていきました。同家ではその他に使用人達の生活指導まで行うようになります。給金が少ないとこぼす者に、夜なべにナワやワラジを作る駄賃稼ぎを教えたり、女中には、ご飯の能率的な炊き方を指導。お釜の底全体に火が通るような薪のくべ方。釜の底のススは熱の伝導効率が悪くなるからと削らせ、それによって余った薪を買い上げるなど、やる気を起こさせるインセンティブ手法を使って、使用人の心をつかんでいきます。また、金に困った者には、

自分の給金の中から貸してやったりもしましたが、それにはきっちりとした返済計画をたてさせ、生活指導の中で、積小為大や、勤労、分度、推譲、そして至誠を教え込んでいきました。文化一一年（一八一四）、二八歳の時に、使用人達のお金を金次郎が預かる形で、「五常講」を立ちあげる。これがヨーロッパより早く生まれた協同組合です。

五常講で、仁、義、礼、智、信の徳を実践

講は、相互扶助組織で、鎌倉時代に無尽講などのかたちで生まれました。何人かが集まって組合のようなものを作り、みんなが預金したものを、必要としている組合員に無利子で貸し付け、約束の期限に定めた金額を返済させるというものです。

五常講の基本的ルールは、仁、義、礼、智、信の五つの「人としての心掛け」の実践。これは、儒教の倫理的、道徳的な自覚を元に、金銭の貸し借りをしようとするもので、例えば、定められた期限で返済されると、次に必要な者にと、順繰りに融資していく。返済できない者がでたときには、連帯保証で弁済させるなど、金融システムとしては、シンプルなシステムが確立されていきました。返済がままならなくなると、人間、貸した者を恨むことが、世の常ですが、五常講の考え方は、（仁）慈愛をもって困っている人に融資する。（義）借りた者は返済という正義を貫く。（礼）貸してくれた人に礼を尽くして感謝する。そして、（智）借りたお金を返すために智恵を絞って工夫努力をする。（信）返済の約束は守ることで信頼関係を相互に保っていくというもので、これによって、仁、義、礼、智、信の徳を実践したことになるのです。

農協と同じ、営農指導や生活指導の実践

服部家での使用人たちの意識の変化は目を見張るものがあり、十郎兵衛はすっかり金次郎を信頼して服部家の家計立て直しを依頼することになります。このことが藩主・大久保忠真の耳に入り、領民の手本となる者一三人の内の一人に選ばれ、表彰（三二歳）されました。

表彰は、金次郎が、働く目標を自分から社会に換えたきっかけになりました。表彰文の「その身はもちろん、村のためにもなり」が、金次郎の社会貢献への意欲に火をつけました。服部家を立て直した後、小田原藩に名主格で登用されて、大久保家の分家、桜町領（現栃木県二宮町）の立て直しを引き受け、栢山の田畑や家財を売り払い、退路を断って桜町に移り住みます。そして、各藩の財政再建を果たしていくわけですが、再建には、そこに住む人々の心構えを改めさせることから始め、その上で、尊徳仕法を徹底して指導していきます。領民の中に五常講も組織化されて農村金融が生まれ、また、領内を歩き回っては、農業生産の状況を見て周り、現代の相互扶助組織である農業協同組合の主要事業、農家に対する営農指導や生活指導（分度・推譲）などを実践していきました。

営農指導の一例は、天保四年、金次郎は農家でご馳走になったナスが、いつもと味が違い、秋ナスように種が少なかったことから、長老から聞いていた天明の飢饉の状況と同じだと察知、すぐさま、農家に飢饉対策として、凶作に強いヒエを播くように指導し、桜町では飢える人を出さなかったといいます。この経験から、引き続き、雑穀の生産を指導し、備蓄を進めたことから、天保七年、諸国を襲った「天保の大飢謹」にも、桜町では周辺の村々を救う余裕さえありました。

近代に生まれた相互扶助組織

イギリスのランカシャー州ロッチデールの織物職人たちが一八四四年に相互扶助組織を結成しました。産業革命により、機械化された織物工場では、職人達は劣悪な労働条件のもと、低賃金で働かされました。加えて、食料品は高く、商人の中には、品質や量目をごまかして、儲けるものも多かったことから、小麦粉やバターの共同購入をして、生活防衛を行ったのが始まりです。その頃、ドイツでは、農地改革が終わり、農村は急速に貨幣経済に呑み込まれ、物価が高騰しました。農民の多くは自作農になっていたことから、地租など高い税金に苦しんでいました。さらに、凶作で、多くの農民が高利貸から金を借り、借金地獄に落ち込んでいたことから、それを救うため、一八四九年、ライファイゼンが指導して「貧農救済組合」を作り、融資事業を始めました。特に、困っている農民に、低利で融資して、高利貸から借りた分を返済させて生活を立て直させたという点は、金次郎の仕法と同じですが、むしろ、これより三五年も前に、金次郎は人々の心をつかんで、五常講として相互扶助の金融を立ちあげていたことは驚くべきことです。

今、求められる尊徳の教え

今日、教育改革の中で、道徳の時間の導入が論じられていますが、いじめや命を粗末にする昨今の風潮は、教育現場はもちろんのこと、家庭や地域社会との連携の中で尊徳

の教えを生かしていくことも必要ではないでしょうか。また、夕張市の財政破綻をはじめ、破綻の危機に直面している多くの自治体の現状を見ると、尊徳が、各藩の財政再建に活用した尊徳仕法を見直して、行財政改革を考える時期にきているのではとつくづく思います。

没後一五〇年の昨年、生誕二二〇年の今年というこの時期、改めて、皆さんと考えてみたいものです。

（東京都農林水産振興財団勤務）

注一　「菜種の栽培」夜勉強に消費する行灯の油。おじさんに迷惑をかけないようアブラ菜を荒地で栽培し七升もの収穫をみる。

注二　「捨て苗」捨てられていた苗代を、もったいないと使われていない用水で栽培し一俵もの収穫をみる。

注三　「積小為大」小さな努力を積み重ねていけば、大きな収穫や成果に結びつく。

注四　「勤労」自分に出来る仕事で社会貢献すること。

「分度」一人ひとりが、自分の立場をわきまえ、ふさわしい生活を送ること。

「推譲」余財を生み出し、村のため、人のために使えば、家々や村も反映する。

「至誠」真心が伴う事が大切。

（写真の説明）

金次郎のブロンズ像

明治天皇が好んで表御座所（執務室）の机の上に置いた岡崎雪聲（せっせい・後に東京美術学校教授）の少年期の金次郎（ブロンズ像）は、石像のモデルとなった。明治神宮所蔵

金次郎石像

ＪＡ町田市の金次郎像は、素朴で愛らしい大変貴重な石像です。石像特有のニッカポッカスタイル。本は大事に両手で持って、前を見ています。地域のシンボルとして大切にしていきたいものです。

本稿は、平成一九年五月三日に本会が開催した、二宮尊徳没後一五〇周年記念講演会での大竹道茂先生の講演録の一部である。

（編集部）

町田地方史研究

第19号

町田地方史研究会